

## 第十五回南のシナリオ大賞

### 大賞

#### オルガニストを探しに

##### 萩 安理紗

「オルガニストを探しに」あらすじ

浮かれた大学生たちが湘南の海で遊んでいる

そのなかの一人が今井だ。長崎県五島市から、

都内の大学に進学して初めての夏休み。今井は

サークルの部員と海に遊びに来ていた。彼には気

になる女性がいる。サークルの先輩である涼子だ。

涼子は奇妙な虚言癖があった。自分の父親と

出身地について、妙な嘘を繰り返すのだ。今井は

涼子の虚言癖の下らなさを指摘してしまう。傷

ついて走り去る涼子。困惑する今井。サークルの

先輩である原田は、涼子の虚言癖の原因を今井

に教える。

涼子は、津波で行方不明になった父親を、空

想の世界でなんとか生かそうとして嘘を重ねて

いたのだ。夜の浜辺で並んで座る、今井と涼子。

今井は涼子のために一つの空想を語る。涼子の

父は五島の教会で、パイプオルガンの演奏をして

いるという物語だ。

夜の海が、二人の幻想を見守る。

波の音。

蝉の声。

はしゃぐ人々の声。

今井「(大声で)原田さん! ビールです」

原田「(遠くから)サークルの人数分、買(こう

てきたかー?」

今井「(大声で)6缶パック、3つも買いまし

たし。ぬるくなるんで、一回海から上がってく

ださいい」

涼子「今井くん。そのビールはダメ」

今井「(驚いて)りよ、涼子さん。沖の方にいる

と思つてました」

涼子「泳ぐの疲れちゃった」

缶ビールを開ける音。

涼子「あたしのパパ、ビール会社の社長なの。

だから他社のビール飲んじゃダメ」

登場人物

今井 (19)

涼子 (20)

原田 (21)

(終)

ゴクゴクと飲む、喉越しの音。

缶ビールを開ける音。

今井「九州男児は硬派なんです！」

今井「とか言いながら飲んでるし！」

原田「東京の海ってええもんやなあ」

？」

涼子「ライバル会社のけど美味しいー」

涼子「原田ー。ココ湘南だから神奈川だよ」

涼子「いいな。毎日ちゃんぽんと皿うどんかー」

今井「つてか、先週の飲み会だと父親はピアノス

原田「埼玉、千葉、神奈川は東京や！」

今井「毎日は食べません！」

トつて言つてましたよね？」

今井「括りが雑すぎます」

原田「おやつはいつもカステラなんやろ？」

涼子「言つてない。ダメだよ。新入部員が先

涼子「関西人って大阪南港で泳ぐのー？」

今井「そんなに食べません。じゃあ大阪人のおや

輩に口答えするの」

原田「涼子のアホ！ あんな汚いトコで泳げる

つは毎日たこ焼きなんですか？」

今井「先輩なら先輩らしく、嘘ばつかつくのやめ

わけないやろ！」

原田「アホか。たこ焼きはご飯や」

てください！」

涼子「大阪の人って、スグにアホって言う」

涼子「えー。おやつだよ。あたしの地元の福岡

涼子「これだから一年生は。大学生の上下関係

原田「東京の大学の奴はスカしとんなあ」

だとねえ。明太子とチーズたつぷり入れるん

の厳しさを分かつてない！」

今井「俺たち全員、東京の大学生ですよ」

だー」

今井「夏は海行つて、冬はスノボするだけのサー

原田「ええツツコミ。今井も飲みいや」

今井「……涼子さん」

クルに厳しき必要ですか？」

原田「なに？」

涼子「なに？」

涼子「……今井くんつてマジレスばつか」

缶ビールを開ける音。

今井「この間、東京生まれ東京育ちのシティー

今井「えっ」

原田「ほれ」

ガールつて言つてましたよね？」

原田「ほれ」

涼子「うそーん」

砂浜を歩いてくる音。

今井「未成年飲酒なのでダメです」

今井「山手線内側育ちつて言つてました」

原田「買（こ）うてくるのはええんかい」

涼子「そうだっけ？」

原田「泳ぎすぎて、ホンマ喉渴いたわー」

涼子「今井くん、ちよつと真面目すぎー」

今井「その前はロサンゼルス出身の帰国子女

って自慢してました」

涼子「記憶にないない」

今井「何でそんな下らないことばかりで嘘つくん

ですか？ みっともない」

大きな波の音。

涼子「（不機嫌に）……下らないことなら、

嘘ついたっていいでしょ」

今井「（驚いて）……え？」

原田「（慌てて）おい、涼子」

涼子「疲れたから、ホテル帰って休むね」

今井「あの、え、その」

涼子「ビールありがと。今井くん」

砂浜を走り去っていく音。

今井「（大声で）涼子さん！」

原田「ええ、ええ。ほっといてやれ」

今井「でも」

原田「涼子のホラ吹きも大概やしな。ゴメンな

嫌な思いさして」

今井「その、涼子さん、なんで」

原田「……またあとで話すわ。（大声で）おー

い！ 泳いでる奴ら！ ビールぬるなるぞ！

はよ取りに來い！」

コオロギとスズムシの声。

静かに打ち寄せる波。

砂浜を歩いてくる音。

今井「……涼子さん」

涼子「あ、今井くん……」

今井「ずっと浜辺に座って、夜の海眺めてたんで

すか？」

涼子「いい景色でしょ。隣座る？ どうぞ」

今井「……失礼します」

砂浜に座る音。

涼子「あたし達、カップルみたいー（笑う）」

今井「あの、すみませんでした」

涼子「何が？」

今井「その、昼間のこと」

涼子「ああ……」

今井「俺、色々知らなくて」

涼子「（遮って）原田に聞いたの？」

今井「……はい」

涼子「あのお喋り野郎めー。聞かされても困るよ

ね」

今井「そんなこと」

涼子「あたしが宮城出身でさ。パパが震災の津波

で行方不明のままだなんて」

今井「……ホントにすみません」

涼子「なんでそっちが謝るの？ 悪いのは嘘つき

のあたしだもん。……ゴメンね」

今井「涼子さん……」

涼子「みんな、そんな顔になっちゃうんだ。

本当のことを知ると」

今井「今の俺の顔？」

涼子「うん。その傷ついた顔。真実は人を傷つけるよね。嘘の方がまし」

今井「……優しいんですね」

涼子「ぜんぜん。逆。あたしが周りの優しさに甘えてんの。原田やサークルのみんなを、下らない嘘に付き合わせてる」

今井「下らなくないです」

涼子「……下らないよ」

風が吹く音。

涼子「他人を騙し通す気もない、コロコロ変わる嘘はダメなんだよ」

今井「ダメだとしても、俺は涼子さんの嘘、嫌いじゃないです」

涼子「なんで？」

今井「うーん。なんかキラキラしてて」

涼子「多分、それあたしの希望が詰まってるから」

自分の出身地やパパの職業に」

今井「希望かあ」

涼子「頭の片隅のどっかで思ってたの。パパはまた生きてるって。だって遺体、見つかったないんだよ？」

遅いかかる津波の音。

涼子「大きな大きな津波に飲まれて」

嵐でうねる海の音。

涼子「嵐の海に投げ出されても」

男性が息継ぎを繰り返して、泳ぐ音。

涼子「パパは必死に泳いで」

男性が激しく呼吸をする。

海から浜辺に上がる水音。

涼子「どこかの陸にたどり着くの」

今井「それって東京や福岡やロサンゼルス？」

涼子「そう！そして」

ピアノのメロディ。

涼子「得意だったピアノか」

ビールをグラスに注ぐ音。

涼子「好きだったビールを極めて」

今井・涼子「ピアニストかビール会社の社長に」

なってる！」

涼子「(笑う)」

今井「(笑う)」

涼子「もう一度この世界でママと巡り合って、

また私が生まれてるの」

今井「地球上のどこかで、3人が幸せに暮らして

るんですね」

涼子「SFっぽい馬鹿な妄想かな？」

今井「妄想なんかじゃないと思います」

涼子「……どうして？」

今井「だって『ありえない』だなんて、誰にも言

えないじゃないですか」

涼子「今井くん……」

今井「涼子さんは自分のことを嘘つきだって

言ってるけど、俺は違うと思います」

涼子「そうかな」

今井「考えつくだけの可能性を話しているだけ

です。きつと」

涼子「(ゆつくりと)かのうせい」

静かな波の音。

今井「俺にも一つの可能性が見えました」

男性が息継ぎを繰り返し、泳ぐ音。

今井「必死に海を泳ぎ続けた涼子さんのパパは

ある島に辿り着いたんです」

涼子「ごうごう」

今井「長崎県の五島列島。小さな島が沢山並ん

でいて、そのうちの一つが俺のふるさとです」

涼子「(笑って)毎日カステラは食べない

島？」

今井「(笑って)たまには食べます」

涼子「それでパパは？ どうなったの？」

今井「ある楽器に出会い、魅了されました」

パイプオルガンの重音。

今井「パイプオルガンです。五島の各島には教会

があつて、弾き手が不足しているパイプオルガ

ンがいくつ也存在しています」

パイプオルガンがド、ミ、ソと鳴る。

今井「涼子さんのパパは、ピアノの技術を活かし

て、あつという間にオルガンの演奏をマスター

しました」

パイプオルガンの短いメロディ。

今井「今では立派なオルガン奏者です」

パイプオルガンのミサ曲。

今井「色々な島の教会に呼ばれ、ミサや結婚式の  
ために音を奏でています」

教会の鐘の音。

今井「結婚式の鐘の音を聞くと、涼子さんの

パパは思います」

パイプオルガンが奏でる、

ワーグナー『結婚行進曲』の冒頭。

今井「『涼子の結婚式では俺が演奏するんだ』

と」

涼子「……パパ」

今井「これが俺に見えた一つの可能性です」

涼子「……聞いてみたいな。パパの演奏」

今井「……俺も」

涼子「パパは五島列島のどこかにいるかもしれない  
いんだね」

今井「はい」

涼子「……連れてってくれる？　いつかそこに

パパを探しに」

今井「もちろん」

涼子「もし、見つけれなかったら？」

今井「何年でも一緒に探します」

涼子「……言ったね？」

今井「（笑う）」

静かに打ち寄せる波の音。

(終)